

スポーツの指導哲学に関する一考察 3

—コーチングと感性—

後藤太郎^{*1}

The study on the coaching philosophy 3
The coaching and Japanese sensibility (kansei)

by

Taro Goto

Abstract

The subject (matter) of this study is, to consider whether sensibility is necessary at the (actual) spot of competitive sports.

During guidance (or coaching instruction) in practice, There are scene that the intention of the coach (or coach's intention) may not be transmitted to players against coach's will.

Nevertheless if he or she forcibly try to convey coach's recognition without thinking about a variety of situations and each other's situation, the various problems can occur.

In this main issue, as the results of studying the problem to clue the argument of Kuwako' theory, from person to person, convey accurately recognized in the language, or acquisition that was made is the view that difficult. Therefore understanding to share the sport is intended to proactively acquired from the space, sensitivity study results that it is necessary is made. That experience is important is shared in coaching also the than, is to create a situation to capitalize the existence of sensibility, was concluded to be the mission of the coach.

1. はじめに

日本のサッカーはゴールを決めることができないと言われる。日本サッカー協会は、「ゴールを奪う」という問題を日本の指導者全体で共有するため、指導指針を打ち出し、コーチング実践の改善に着手している。しかしながらこの「決定力

不足」を日本人の誰もが認識しながらも、いまだ改善する手掛かりすら掴んでいないのである。何故だろうか。一般的に日本人は、綺麗にパスを繋いで美しくゴールを決めようとするのが好きであると言われているが、この綺麗にパスを繋ぐという価値観が理由という声もある。このことから考えれば日本人選手やコーチは、空間全体の意味

* 1 東海大学体育学部競技スポーツ学科

や文脈、機能から、価値を誘導されている可能性が考えられるのである。このように何かの価値が存在するということは、仮に決定力不足について論理的に理由を把握していたとしても、当の空間に組み込まれた意味や文脈や機能が、人々に価値のあるものと認識されているということである。もしそうであるならば、スポーツの価値は言語において論理的に把握されているものではなく、競技とかかわる人たちとその空間において、意識や行為そのものに結びついているのではないだろうか。すなわち一定の認識がありながら行為の定まらない現場を、どのように解決するのかということが、コーチングの新たな問題になるのではないだろうか。

この一例のように競技にかかわる人々は、コンテキストが定まらない環境の中で、自己と状況に適正な関係を求め、不適正な関係を回避しようとするのである。実践において合理的、機能的な理解が困難なとき、コーチはどのように目的へ向かって教え導けばいいのだろうか。このようなコーチングの難問を、もしも「感性」という能力が克服するものであるならば、この可能性を考えることは興味深い。そこで本研究は、競技スポーツのコーチングにおける「感性」の可能性について検討することを目的とした。

今回の研究では、①コーチング環境を分析するため、桑子俊雄の論を手掛かりに分析装置を設定し、感性の定義に検討を加える。②分析装置を手掛かりにコーチングで起こる具体的な問題を考察する。③岡田武史の実践と桑子俊雄の論を照らし合わせて検討を加える。本研究は「感性」に着目し、スポーツの指導方法を原理的に考察することで、スポーツの指導哲学研究のための基礎的資料を提示することを目的とする。

2. 桑子俊雄の感性

広辞苑によれば「感性」とは一般的に「外界から印象をキャッチする能力、感覚を伴う感情や欲望、衝動を含むもの」¹⁾とある。さまざまな解釈

がある感性の定義の中から、本研究では、日本感性工学会において定義された「感性」を用いて論じたい。要約すれば、ここでの「感性」は、英語(sensibility)で訳すことができないものであると結論づけられ、kanseiと日本独自の解釈で定義されている。この感性は、感覚、感情、身体性を含んだ、いわゆる知覚を意味するものとは異なるという。桑子は感性を受動的な能力だけでなく、「豊かな感性」²⁾、「するどい感性」³⁾といった能動性を支持するのである。桑子は感性についてこう述べている。

「感性とは環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造してゆく、価値にかかわる能力」⁴⁾。

地球上に生きる人間は、誰しもが空間的身体的存在である。すなわち人間は環境とのかかわりにおいて生は成立するということであろう。桑子は身体と環境の不可分な関係において、「感性」を環境世界と自己の身体との「交感能力」⁵⁾としており、さらに「環境と自己の関係を捉える能力、配置と履歴から世界を感知する能力があるとすれば、この能力は、人間が身体的空間存在であるという人間の本質に由来している」⁶⁾と論じている。

3. 感性の背景にある「配置」と「履歴」

さて、コーチング空間をどのように考察していくべきか。桑子は自身の哲学の根幹となる概念についてこう述べている。

感性とは、環境と自己との相関を捉える総合的な情報処理能力とわたしは考える。この情報処理能力の対象のなかに自己の「配置」と「履歴」というものが含まれている。「配置」と「履歴」とは自己の環境とどのような関係にあるかということに関する空間的・時間的情報である⁷⁾。

なるほどこれまでの「配置」が積み重なって「履歴」され、結果、現在のわたしは「配置」されている。その「配置」と「履歴」の相関を、時間的・空間的に捉えようとするのが桑子の言う

「感性」である。ではここで「配置」と「履歴」を分析装置とし、コーチング現場において考えの違う選手とコーチについて考えてみたい。コーチング空間で意見がぶつかり合うのは、それぞれが自分の立場に固執し、自分の立場を絶対的なものとするからである。例えば「わたしはわたし、あなたはあなた」という言い方がある。そこから「わたしの立場からものを見ているので、わたしにとってこれが正しい考え方だ。あなたにとって違うかもしれないが、人それぞれ立場の違いを認めるのが大切である」と主張したとしよう。確かにそれぞれの立場を認めることは大切である。しかしながらこれでは、意見の食い違いが起こったとき、解決方法がない。言い換えれば、実践において選手が一つのプレイを判断するとき、自らの立場（配置）から利益を考え、これまでの経験（履歴）を頼りにしているということである。もちろんコーチも同じであるから、コーチと選手の意見は食い違うということになる。選手の立場から見れば、これまでの経験の積み重ねが「わたし」であり、現在の立ち位置に対して、履歴を消して指導を受けることはできない。ここでもしも桑子がコーチならこう考えるかもしれない。空間的な見方をするため、一度自らの立場を置く。これは自らのものの見方を疑うということでありつまり、状況の全体を相対的に見定め、環境全体の変動に気づいてから、状況に自らの配置と履歴を再対応させるということである。もう少し具体的に考えれば、コーチは環境と自己の相関に配慮をめぐらせながら、対象となる選手と自分の相関を認識するということである。そこでコーチは、あくまでもわたしの実践ではなく、選手と共にコーチング空間が存在するという認識がポイントになるのではないだろうか。今日の個人が尊重されたコーチング空間では、一つの問題を自らの配置と履歴から価値を主張する。そこから個々が基準を設定するから、空間全体の中で自己と「ずれ」が生じるのである。ここで問いとなるのは、実践の中でずれている自己をどのように捉えるかということである。現場において、誰もが納得する解決を見つけ出すことは難しい。例えばチームの勝利のためにコーチがプレイを強制し選手を説得させ

たとしても、この時点で本当の意味において了解はしていない。選手はコーチに気に入られるため「ずれ」を隠し、了解したふりをするのである。ここで考えなければならないのは、あくまでも選手からの主体性における了解なのではないだろうか。その積極性において桑子は「世界のなかで自己の配置を感じる能力」⁸⁾、あるいは「世界と自己との相関を感知する能力」⁹⁾と述べている。つまり桑子は「感性」という自己と環境の相関を捉える情報処理能力が、その主体性において状況を切り開くと考えるのである。

競技スポーツ現場では目標に向け理想を抱き、現実から自己を引き上げようとする一方で、現実が理想に縛られないようにしなければならない。理想と現実のバランスを取るためには、世界の中で自己を空間に位置する一つの風景として客観的に捉えてみることである。そこで自己と他者のものの見え方を考え、価値判断を環境に対応させることができれば、目標に対する空間へ配慮が持てるようになるのではないだろうか。

4. コーチングの実践的な問題

ここで桑子の「感性」を、競技スポーツにおけるコーチングという限定した状況で考えてみたとき、果たしてどのような見方ができるのだろうか。コーチングにおける問題の一つに、コーチの指示が選手に伝わらないという問題がある。例えば、サッカーのドリル練習において選手に「今出したパスのスピードでは相手にボールを奪われてしまうから、もっとパススピードが出るよう強いキックをきなさい」と指示を出したとしよう。一般的にその指示を受けた選手は、指示通りパス練習において強いキックでパスをするものである。しかしながらその後、試合でのプレイを見てみると、改善出来ておらず、指摘した元のパススピードに、ボール奪われるリスクを感じていないのである。何故だろうか。これはコーチングにおいて「パススピードが弱い」という語句そのものの意味や、はたまた発言の文脈一連における理解のずれではなく、自分の置かれた立場という「配置」と、これまで経験してきたプレイすなわち「履歴」が理

解に影響を及ぼしているのではないだろうか。つまりその選手が過去の成功体験をもって今、配置されており、身体においてパスを理解していれば、その成功体験にしたがって現在もプレイしてしまうのである。もしそうであるならば、一つの理解は「配置」と「履歴」においてアイデンティティにかかわるものであり、それぞれの個別性において存在しているということになる。したがって、言語において論理的にコーチングしても、簡単に変わるものはないということである。コーチの良かれと考える指導は、その選手にとって無理やり理論を押し付けられたものとして存在することになる。このように伝えることの難しさは、おそらく多くのコーチが問題としているところであろう。そうであるならばここで視点を変えて、選手が主体的に空間から意味を獲得するというコーチングの方法が必要となるのではないだろうか。

5. 空間的な理解

そもそも実践で起こる現場の問題とは、おそらく多くが外の世界から新しくやって来たものではなく、すでにコーチング空間内に存在する関係によって発生するものである。問題となるのは、そこでコーチがあらゆる「ひと」や「事物」をコーチング空間内において認識しながらも、「感性」の欠如によって意味を自分本位に理解したときではないだろうか。言い換えれば、空間において自分中心的な見方によって関係を軽んじ、同じ空間に生きる他者を感じず、蔑ろにした結果、問題は起きるのである。

ここで空間的な理解を考えるため、あえて「信頼」について考えてみよう。言うまでもなくコーチング空間において信頼は重要な要素である。多くのコーチング現場でコーチの立ち位置は、あくまでも様々な役割を持ったリーダーであり、公共性も含め空間的に存在する。つまりそこでの指導は、空間内における関係が影響すると考えられ、コーチング空間全体の了解があるからこそ信頼を獲得できると言える。では「信頼」とは、どのように獲得することができるのだろうか。コーチの指導は選手の中で情報のレベルで留まっている限

りにおいて異物である。何故なら、先述したように選手には「配置」と「履歴」が存在するからである。たとえしっかりとした指導から情報は獲得できても、それが選手が自分にとって有益なものであるかどうか分からないから、その時も信頼は獲得できないのである。コーチが信頼を獲得できるのは、言語から物事を伝えた瞬間ではなく、空間を共有し、選手と共に状況を創り出した瞬間ではないだろうか。つまり「了解」は、そこで選手が身をもって空間全体から意味を感知したということである。そこでのコーチングは、表情、まなざし、言葉づかい、身体的な振る舞い、間の使い方など非言語による空間のコントロールが影響しているのではないだろうか。それはトレーニングにおける技術の習得、あるいは戦術の理解も同じである。だとすれば、体験の共有によってその場で創り上げる共通の認識が、現場における理解の本質なのではないだろうか。久保は「コーチングという言葉で表されていた働きかけを、特定の『教える』という瞬間ではなく、もう少し長い時間のスケールで検討する必要がある」¹⁰⁾と述べている。すなわち実践の本質を、自らの感性において時間的空間的に認識しようとするものではないだろうか。

サッカー元日本代表監督岡田武史は、チームの戦術ミーティングにおいて編集ビデオの中で、選手の方は見ず、画面に向かって「おお、いいドリブルだな」と説明もなく独り言のように呟くという。つまり、この呟きは選手に向かって教示しているのではなく、空間に放たれている。ということは、岡田が創る空間から、選手自らの主体性において獲得しなければならないという事になる。岡田は言う「修正や矯正はできるだけ排除するんです。すると選手は、パスかドリブルかの選択を、どちらが正しいか正しくないかという思考を経由してではなく、感覚やイメージを通して身体的に判断するようになります」¹¹⁾。なるほど岡田の指導は、あくまでも選手に指し示すまでで、決して選手を矯正しようとししない提案であり、手助けなのである。その身体的な判断をねらう指導は、選手の主体性において自らの能力を空間から引き出

すということが主眼になっている。つまりこれは、空間との関係において創り出すコーチングなのではないだろうか。

6. おわりに

本研究は、桑子の理論を手掛かりに競技スポーツの世界において、コーチの視点から、コーチングと感性の関係を検討することが目的であった。検討された内容は、言語技術において意味を正確に捉えようとしても、現在の自らの配置と、これまでの履歴を伴う背景があり、完全に一致した理解は成立しないことであった。しかしながらこのような状況において岡田は、言語ではなく空間から物事を理解することを我々に提示してくれた。この岡田の事例は日本代表という特別な状況でなくとも、普段、われわれが経験する日常の競技スポーツ空間においても同じなのではないだろうか。コーチング空間から感知するアプローチは、もつれた関係をうまく整理して立体的な図形のように三次元の空間の中で、全体を構造的に整理していく。そしてその整理された人やものの関係の中に自分自身をきちんともう一度位置付けるのである¹²⁾。そこで起きている矛盾は、空間的に自分の立場を捉えることで、感性においてコーチング空間の変動を感知し、それに対応し、自己のあり方を創造していく。そして今、目の前にある状況に対して、空間と自らの配置と履歴の再構築から、「ひょっとして」と感じる直観を引き出すことが重要なのではないだろうか。岡田は言う「人を育てるのは人じゃありません。環境です」¹³⁾。本論の冒頭に挙げた日本サッカー最大の課題である「決定力不足」という問題を、岡田のコーチングと桑子の論に照らし合わせて考えれば、人間の成長を、「教授—学習」という関係のみで「教え込む」あるいは「選手を意図的に変えようとする」のではなく、選手が「ゴールを奪いたい」と本当に思う空間を創っていくことが重要なのではないだろうか。

今回の研究では、構築していく一つのコーチング原理の可能性が示唆された。今後は「コーチング」とは、「感性」が引き出される豊かな空間を創ることではないかという仮説を立て、コーチング哲学の研究を進めたい。

引用・注記および参考文献

- 1) 広辞苑第三版. p.541.
- 2) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.3.
- 3) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.3.
- 4) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.3.
- 5) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.12.
- 6) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.222.
- 7) 桑子俊雄 (2003) 理想と決断, 日本放送出版協会. p.82.
- 8) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.57.
- 9) 桑子俊雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会. p.57.
- 10) 久保正秋 (1998) コーチング論序説－運動部活動における「指導」概念の研究, 不昧堂出版. p.73.
- 11) 岡田武史・羽生善治 (2011) 勝負哲学, サンマーク出版. p.144.
- 12) 「コーチング空間」論に関しては、以下の論文を参考にした。
久保正秋 (1993) 「コーチの行為」分析のための方法論的検討, 体育原理研究第 24 号。
久保正秋 (1994) コーチングの全体的な場の検討, 体育原理研究第 25 号。
- 13) 岡田武史・羽生善治 (2011) 勝負哲学, サンマーク出版. p.151.